産学連携本部

生命を支える農業と食糧にフォーカス
―第３回「国際産学連携フォーラム」開催―

グローバルに活動する海外企業との連携を拡大すべく、「第3回国際産学連携フォーラム 農と食」が2月20日、山上会館で開催された。企業サイドから発信されるメッセージを本学研究者が“受信”し、その後の技術交流を促す産学連携の新しい取り組みである。第3回目の今回は、生命を支える農業と食糧にフォーカスを当て、スイスの世界的企業であるシンジェンタ社とネスレ社から、それぞれ研究部門の責任者を欧州から招へい。会場に集まった学内研究者と学生ら約100名が、両社が目指す研究の方向性や本学への期待について熱心に耳を傾けた。

冒頭、松本洋一郎理事・副学長が、「東京大学の知の公共性と国際性という行動ビジョンのもと、本フォーラムでの交流を通じて国際的な産学連携活動と研究活動へと繋げていっていただきたい」と挨拶。これまでのフォーラムを通じて、参加企業と実際に連携へとつながっている成果について触れ、両社との連携拡大への期待が述べられた。

続いて挨拶に立った農学生命科学研究科長の長澤寛道教授は、「現代の農学はいかに環境と調和した持続的な生物生産が達成できるかが問われています。今回のフォーラムをきっかけに、スイスの企業との関係が生まれることを願っています」と述べた。

2050年には人口が90億人を超えることが見込まれる中で、招へい講演者からはその取り組みや関心領域についての講演が行われた。シンジェンタ社の種子研究開発最高責任者であるRolf Furter氏からは、バイオ技術とともに化学、そして情報処理技術を様々に活用し、穀物の安定した収量の実現を目指していることが紹介された。ネスレ社リサーチセンターのディレクターであるThomas Beck氏は、人口増加と食糧の持続的確保、乳幼児期を含めての栄養バランスに関する課題と、それに対する会社としての取り組みが説明された。スイス大使館の科学技術部長を務めるMatthias Frey氏からは、スイスにおけるイノベーション推進の取り組み状況やその成果に関する紹介が行われた。

講演後に行われた交流会では随所で熱気あふれるディスカッションが続いた。本フォーラムを通じて、学内研究者との対話や交流が促進され、さらなる関係強化と産学連携活動の創出・継続が期待されている。

左から松本理事・副学長、Matthias Frey 氏、Rolf Furter氏、Thomas Beck氏、保立産学連携本部長

講演するシンジェンタ社種子研究開発最高責任者のFurter氏

ネスレ社リサーチセンター・ディレクターのBeck氏